

「物事に意欲的に取り組む姿勢や自分で考える力がついた」

第二ひかり幼稚園(川崎市)
園児のお母さん 中塚浩美さん

現在、小学校三年生の息子、そして幼稚園年長組の娘と、子どもたちは二人とも第二ひかり幼稚園で、石井式漢字教育の指導を受けています。

上の子を幼稚園に入園させるときは、正直言ってそれほど「漢字教育」を強く意識していたわけではなく、有名なドーマン博士の教育理論とも接点が多いという話を聞いて、子どもに何かプラスになればという程度だったのです。

でも、子どもの吸収力というのは本当にすごいですね。ひらがなから教えられた私たち大人からすると、最初から漢字なんて教えて大丈夫なのかしら、とってしまうのですが、当の子どもたちは、難しい漢字もどんどん覚えてしまいます。ひらがなも、改めて「あいうえお」という教え方をしなくても、漢字の送りがなで自然に読めてしまいます。もともと日常身のまわりにある文字というのは、ほとんどが漢字かな交じりなので、本来漢字で表記するものは、はじめから漢字で教えてあげたほうが子どもにとってはわかりやすいようです。

実際、電車に来るときに、表示を見て「これは 行きだね」と言ったり、新聞の番組欄で自分で観たい番組をチェックしたり……、そうい

うことが幼稚園のうちから自然にできていました。

親の立場からしても、まだ小さいから漢字が読めなくても当たり前、という感じですし、学校のように成績がつくわけでもないので、読めたら「すごいね」と素直に誉めてあげられます。親が、そうした心の余裕をもって接してあげられるのも、幼稚園から漢字を学ぶメリットと言えるかもしれません。

おかげで上の息子は、小学校に入っても本を読むのが人好きです。去年の夏休みに、当時ベストセラーだった『五体不満足』を手渡すと、毎日数十分ほどしか読んでいないのに、一週間足らずで読み終えてしまいました。ほとんどの漢字にルビが振ってあるものの、文字が多いので「本当にちゃんと読んだのかしら」と私のほうが不安になって聞いてみると、一応話の内容はきちんとわかっていたみたいです。

また、こうした知的発育の面よりも、さらに大きいのが内面的な成長ではないかと思います。たとえば、幼稚園から出される課題に「素読百回カード」というのがあります。これは、漢字かな交じりで書かれた古典や名文を家で一回音読するごとに親がハンコを押してあげ、50回目、100回目は幼稚園で先生に聞いていただいて、きちんと読めればシールがもらえる、というものです。

決して強制ではないのですが、「何か日標をもって、それに対して努力を積み重ねていける人間に育ってほしい」という、私自身の思いもあって、上の子のときから毎日欠かさず続けるようにしました。時間にすれば、一日30分足らずのことなんです、自分がやったこ

とに対して、シールがもらえたり、そのシールがたまるとミニ賞状をもらえたりと、きちんと評価してもらえるのがすごく自信になるみたいです。逆に、人から認めてもらうには、自分がやるべきことをやらないとダメなんだということも、子どもなりにわかってくるみたいで.....。

ですから、上の子は小学校に入ってから、宿題などはあまり親がうるさく言わなくてもやりますし、何かやりたいこと知りたいことがあると「じゃあ、本で調べてみようか」というように、自分でものを考える力がついたのが大きいと思います。学校の担任の先生からは「何にでも意欲的に取り組んでくれる」と言われ、私も嬉しく思っています。

下の女の子のほうは、この先、学校へ上がってどんなふうに成長していくのか、まだわかりませんが、一年ほど前から習いはしめたピアノの先生には「教えたことがきちんとできて、楽譜がちゃんと読めて、音が聴き取れて、もう小学生みたいですね」と言われたりします。これも、漢字教育によって培われた集中力や理解力のおかげかもしれません。

自分の学校時代を思い出してみると、漢字の勉強ってただテストで点数をとるための勉強でしかありませんでした。ですから、改めて子どもたちと一緒に漢字に触れてみると、漢字の意味や成り立ちなど新しい発見がたくさんあります。その意味で、いちばん楽しんでいるのは、もしかしたら私自身かもしれませんが、子どもたちにとっても、知育だけでなく人間としてのいちばん根っこの部分の成長に、漢字教

育は大きな役割を果たしてくれているのではないかと思っています。